

東南アジア稲作民族文化総合調査団の資料と活用に向けた模索

田口理恵（東海大学海洋学部）

1. 東南アジア稲作民族文化総合調査団資料利用の背景

- ・生態史プロジェクト（総合地球環境学研究所・研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究 1945－2005」）

1945年から2005年の60年間の、東南アジア大陸部メコン河流域地域にみる

人間集団と環境との相互作用の複合的な歴史を明らかにする。

- ・プロジェクト内でのモノと情報班としての活動＝博物館資料とデータベース

モノ（道具類）：生態環境に由来。人と自然環境の相互作用の具体的な場面・場面に介在。

モノから、人々の営為も生態環境も、双方の変化の動態を展望。

- ・手がかりとした博物館資料（メコン河流域での調査と資料）

1957～58年 日本民族学協会による東南アジア稲作民族文化総合調査（民博所蔵）、
大阪市立大学による学術調査

1969～74年 上智大学西北タイ歴史・文化調査団（南山大学人類学博物館所蔵）。

1970～78年 天理教によるラオス伝道と巡回医療隊派遣。

1974～75年 渡辺仁によるラオス調査（東京大学総合研究博物館所蔵）。

1989～90年 国立民族学博物館によるラオス資料収集調査。

1990年代後半～ 鹿児島県歴史資料センター黎明館の川野和明氏による収集調査。

奄美大島の原野農芸博物館による収集調査。

*モノだけに限らず、写真、動画、紀行文、研究論文からフィールドノートなどがある。

*ラオスを中心に活用。

*1975年の政変以降、1980年代末まで事実上の鎖国状態となる。

2. 国立民族学博物館内の東南アジア稲作民族文化総合調査団資料

①モノの調査

- ・プロジェクト関連地域の標本資料：タイ 5093点、ラオス 1103点と、雲南 1017点。

- ・1103点のラオス収集資料

収集地や現地名がわかるもの、そうでないもの（例えば、業者経由で購入、寄贈等々）

など、標本資料に付された情報には偏りがある。使えそうなのが、【03-014】シリーズの530点、【02-026】シリーズの94点、【C50-174】シリーズの97点。

【03-014】平成3年（1991年）に標本登録されたもの。

1989年から2回計画で実施された収集調査の成果。モノは2対で集め、ワンセットは民博、ワンセットはラオス国立博物館に納めてきたという。

【02-026】平成2年登録のもの。現地エージェントからコレクション購入したもの。

【C50-174】昭和50年（1975年）登録の資料。

日本民族学会の前身である日本民族学協会時代に収集された資料。民博設置に伴い、日本民族学協会附属博物館から文部省資料館に移管され、そこから民博に移管された。

・民博【C50-174】シリーズ内のラオス資料は97点。

一方、第一次稲作調査団による採集資料品目（常民研）では、タイ資料199点、ラオス資料72点、カンボジア資料25点。

*稲作調査団として収集した資料。調査団メンバー個人の収集品で、後に民族学協会附属博物館に寄贈されたもの、同時期に実施された市立大調査による成果も含まれる。

②写真資料

・写真ネガ特別収蔵庫に「日本民族学協会コレクション」として7661枚の写真が死蔵。

資料移管に際して、国会で報告した資料数と実際のモノ資料の数に食い違いがあったため、報告数にあわせるために、写真資料をモノ化した。

・そのうち第一次稲作調査団による写真は2535枚。

撮影場所等が不明な写真を除くとタイ786枚、カンボジア786枚、ラオス955枚。

*写真資料は、台紙に写真を貼り付けたもの。撮影日時、撮影者、撮影場所、写真タイトルもしくは撮影対象に関する説明等が記されている。台紙ごとに記載内容にばらつきがあり、撮影者によっては撮影日時が月のみであったり、撮影場所も国名のみのもものから村の名前まで記されているものもある。

3. 日本民族学協会による東南アジア稲作民族文化総合調査団

・東南アジア稲作民族文化総合調査は、1954年に協会創設20周年を迎えた日本民族学協会が、その記念事業として企画された。

第一次調査：1957年8月から約8ヶ月でベトナム、カンボジア、ラオス、タイ。

→タイ、カンボジア、ラオス

第二次調査：1960年2月から約3ヶ月で東部ジャワ、バリ島、ロンボク島。

→南ベトナム、インドネシア（スマトラ、バリ、ロンボクなど）

第三次調査：1963 年 6 月から約 10 ヶ月で、中部インドやネパール。

- ・第一次調査団（稲作調査団）によるタイ、カンボジア、ラオス調査。

団長松本信弘、農学（浜田秀男、長重九）、言語学（浅井恵倫）、民族学（河部利夫、岩田慶治、綾部恒雄）、考古・歴史学（清水潤三、江坂輝弥）、技術文化（八幡一郎）の専門家が参加。さらに讀賣新聞報道班と映画班が同行し、現地では和田格（医師）、石井米雄（外務省）などが参加。

- ・日本民族学協会は東南アジア稲作民族文化総合調査委員会を組織して記念事業を進めた。

委員長岡正雄、幹事に馬淵東一、白鳥芳郎、河部利夫、松本信弘、浅井恵倫、八幡一郎、岡正雄、宮本延人、西村朝日太郎、山本達朗、蒲生正雄。委員は古野清人、牧野巽、盛永俊太郎、今西錦司、浜田秀男、岩田慶治、須田昭義、川喜多二郎。

調査団東京事務局は、上智大学白鳥教授研究室。

- ・当時の民族学協会：協会役員が渋沢敬三、理事長が岡正雄、理事が松本信弘、浅井恵倫、八幡一郎、須田昭義。

＊渋沢敬三は稲作調査団の後援会会長にもなり、広く財界から寄付を募って稲作調査事業をサポート。文部省からの補助金 4,000,000 円に加えて、寄付金 13,668,240 円で実施。

＊稲作調査団が文部省補助金を得て、すでに外貨割り当てを受けていたこともあり、同時期に調査を計画していた大阪市大学東南アジア学術調査隊は「一日四ドル、百日分」の外貨割り当てしか得られなかった。同調査隊の隊長は梅棹で、調査紀行『東南アジア紀行』[梅棹 1979]をみると、稲作調査団をライバル視するような複雑な心境が見え隠れする。

- ・その他の資料

読売新聞映像部製作の記録映画『民族の河メコン』は読売映像。

当時の状況を知る手がかりとなる日本民族学協会事務局関係資料は常民研。

浜田氏採集の稲の品種 200 種（1200?）の全サンプルは佐藤洋一郎氏が所持。

＊第一次稲作調査と市大学術調査の双方に、岩田慶治と石井米雄が関わっている。

＊稲作調査団の東京事務局を務めた白鳥芳郎は、1967～74 年と 4 次に渡って実施された上智大西北タイ歴史文化調査（『メナム河上流（メーピン河）地帯における山地および平地諸民族の交錯過程の実態的調査』（白鳥芳郎代表））を組織。稲作調査団メンバーの八幡一郎も参加。

4. 常民研の資料

東南アジア稲作民族文化調査団関係文書（第一次と括られた束）の内容

・1957年の「東南アジア稲作民族文化総合調査（第一次）」日本民族学協会関係書類を製本したもの

・The Far Eastern Quarterly Southeast Asia. (Thailand, Indochina, Vietnam) Vol.XIV. No.5 Sep.1955

・Bibliography of Siam(Thailand)：1952年東京外国語大学タイ語科作成資料

・東南アジアの稲作民族文化の総合調査趣意書（昭和32年3月）印刷

委員会、趣意、計画概要、諸外国の調査研究活動の概要、調査行程（要図）など。

・後援会規約＋入金用紙

・寄付依頼先（23業種、経済界へ）

・11日5～8日（水～土）新宿中村屋での文化展（案）メモ

・装備及消耗品表

・寄付への礼状（後援会会長による）会長：渋谷敬三、安田生命保険相互会社内

・現地関係との交渉の役割分担メモ、

タイ・ラオスは河部利夫、カンボジアは白鳥芳郎、ベトナムは山本達朗、三根谷

・メコン河とトンレサップ河の航行可能性（表）

・調査項目（昭和32年7月22日）稲作に関する項目 197.

・Packing List: The Research Party of Rice-Culture in Southeast Asian Country

・調査日程（実際の調査日程メモ）

・税関への書類

・採集品リスト（展示用？タイ 199、ラオス 72、カンボジア 25）

→（タイ 211、ラオス 116、カンボジア 28、松本班 72）

・「日本人の源流を探る『東南アジア民族文化展』」（案）

日本民族協会、読売新聞協賛

6月3～8日、日本橋白木屋：展示は八幡担当、各種族のモノを展示。

・記録映画のナレーション（森繁）

・文化展の各種族出品目録

・（民研）座談会（1）（2）の抜き取り

・収支決算表（政府から4,000,000円、寄付金13,668,240円など）

・Jukyu Cho “Cultivated Rice Plants in the Basin of Mekong River”（非売品）

・第二次稲作民族文化調査団趣意書、ベトナム、インドネシア、1959年

2）ファイル「東南アジア稲作民族文化総合調査委員会」

委員会調査報告（製本）のゲラ、下書き、メモ類、新聞の切抜きなど

3）封筒（第一次書類）

文部大臣への申請書（昭和34年5月）、32年趣意書、Packing List（ヒマラヤ）、
寄付と金額、34年趣意書（ベトナム、インドネシア地域、計画表）

Bond for Transmission of Goods Imported by Expedition to Himalaya

その他の民族学協会事務資料のなかに

- ・レンネル隊関係文書
- ・35年の事業（博物館目録の印刷費）
- ・資料購入申請のメモ：岩田慶治より申請分（稲作資料と市大調査団収集資料）

5. 稲作調査団資料の活用

稲作調査団からの先行学術調査（生態学、農学、医学、地理学、民族・人類学などが集まり、総合的な取り組みを目指した当時のフィールドワーク）と、それぞれの専門分野に細分化していくその後の過程とを改めて考えさせられる。

稲作調査団から生態史プロジェクトまでの連続性を意識～われわれは何を引きつぎ、受け継いできたのか、そして、現在の取り組みをこの先どのように持続させ発展させていくのかを自問する契機。

- ・民博内の日本民族学協会コレクション

アチック関係：近藤さん

写真資料：稲作関係のデジタル化など→人間文化研究機構の予算で全部をDB化。

権利関係もクリア。ネガはなし。

- ・生態史プロの成果の中で活用

博物館間統合DB（白鳥・南山資料、川野資料、原野資料、天理）

展示企画（モチゴメ展、水の器展）

- ・現地調査で利用

【大阪市大東南アジア学術調査隊】

1957-58年の第一次調査：梅棹忠夫を隊長に、小川房人、依田恭二（植物生態学）、川村俊蔵（テナガザル）、吉川公雄（ハチ）、藤岡喜愛（人類学）からなり、現地から石井米雄らが参加。

1961年からの第二次調査：岩田慶治を隊長とし、小川、依田、荻野（森林研究）、松岡（栽培植物学）、今立（昆虫学）に、四手井網英、吉良竜夫が参加している。

地質学の石井健二を団長に第三次調査隊としてカンボジア調査が実施されている。

【東京大学総合研究博物館の渡辺仁コレクション】

東京大学総合研究博物館には、渡辺仁氏（1919-1998年）の研究業績資料があり、それらは渡辺氏が亡くなった1998年に、ご遺族により同博物館に寄贈されたもの。

そのうち、ラオス関係はスライド写真が293枚、フィールドノートや、科研書類等の文書資料および漁具実物3点。渡辺仁ラオス調査資料は、1974年（昭和49年）12月から翌年1月にかけて実施された「ラオス国考古学調査」の関係資料となる。

調査団（渡辺仁、重松和男、安斎正人からなり、現地から麗澤大学関係者および文部省考古学局のダラ氏等が参加）は12月8日にビエンチャン入りし、12月中はヴァンビエン（12月14日～21日）、ルアンプラバン（12月22日～29日）、年が明けて1月4日から11日まではターク周辺の間窟を回り遺跡調査を行う。この間、渡辺は「土俗考古学（生態）の立場から、ヴァンビエン周辺の現生民族の一端について」観察・聞き取り調査も行っており、「ヴァンヴィエン地域は・・・野生動植物の採集活動（狩猟、漁撈、植物採集）の調査に適していること」から、昭和51年度から先史考古学（発掘調査）と土俗考古学（生態調査）による本格的な調査の実施を計画していた。

調査計画書によれば、昭和51年度からの本格的調査は、10人（渡辺仁代表、重松和男、大塚柳太郎、安斎正人、五十嵐忠孝、口蔵幸雄、鷹野光行、新田英治、プラシット・スーリサク、ダラ・フームスーヴァン）で組織され、第一回調査（昭和51年8月10～52年1月23日まで）から、56年度までに3度の海外調査を実施する長期調査計画を予定していた。ところが、ラオスの政変により調査計画そのものを断念せざるをえなくなったという経緯をもつ。

【天理大学附属天理参考館】

天理大学附属参考館では、基本的に標本管理は標本カードと台帳によってなされている。地域によって、台帳およびカード情報がデジタル・データ化されているところもある。

特に1986年までに登録された東南アジア大陸部資料は全部で768点あり、ラオス資料は35点、タイ576点となる。49点あるカンボジア資料には、第三次大阪市立大（カンボジア）調査団（石井健一代表）収集の、農具に関係した道具資料35点が含まれている。

ラオス資料 35 点には、1958 年に岩田慶治氏から得た 2 点や、1965 年 10 月 27 日登録の 8 点および 1968 年 4 月登録の 4 点など、名古屋教会長森井敏晴氏寄贈のものが含まれる。森井氏は 1969 年 6 月、1975 年 4 月にもラオス資料を参考館に寄贈している。この森井氏が、1975 年 1 月からの 3 ヶ月におよぶラオス巡回医療隊（第一次）の派遣を橋渡し、同年 9 月にはラオス王国宗教省より「布教許可」を得て実施された天理教ラオス伝道を指揮した中心的人物でもある。

【南山大学】

1969 年～1974 年に実施された上智大西北タイ歴史文化調査団（白鳥調査団、第一次～第四次）の成果となるコレクションが南山大学人類学博物館にある。このコレクションは、2000 年に上智大・量研究室から南山大学人類学博物館に寄贈されたもので、モノ、写真、動画から構成される。

参考文献

安斎正人 1985「補遺：ラオス国先史洞穴遺跡調査の覚書」『東京大学文学部考古学研究室紀要』第 4 号：55-101。

原野農芸博物館 2000 『原野農芸博物館収蔵品目録 I－東南アジア大陸部』、財団法人奄美文化財団・原野農芸博物館。

伊藤幹治 1988「日本の文化人類学の歩み」伊藤・米山編『文化人類学へのアプローチ』291-299。

Murdock, G.P., Ford, C. S., Hudson, A.E., Kennedy, R., Simmons, L.W., Whiting, J.W.H

1982 *Outline of Cultral Materials*. (5th edition), Human Relations Area Files, INC.

西秋良宏 1999「ニューギニアの弓矢」東京大学総合研究博物館ニュース『Ouroboros』第 8 号。

大林太良、杉田繁治、秋道智彌編 1990「東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析」『国立民族学博物館研究報告別冊』11 号。

澁澤敬三 1984 (1954)「絵引きは作れぬものか」澁澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編『新版絵巻物による日本常民生活絵引』、平凡社：viii・ix

田口理恵 2004「博物館コレクションをコレクションするーモノ研究からみたメコン流域地域収集の民族資料の可能性ー」、『Asian Studies Watching 論集へアジア学の最前線』（アジア研究情報 Gateway、東京大学東洋文化研究所 <http://asj.ioc.u-tokyo.ac.jp/html/017.html>）

2008「50 年前のメコン河流域」『月刊みんぱく』第 32 巻第 2 号通巻第 365 号：8-9。

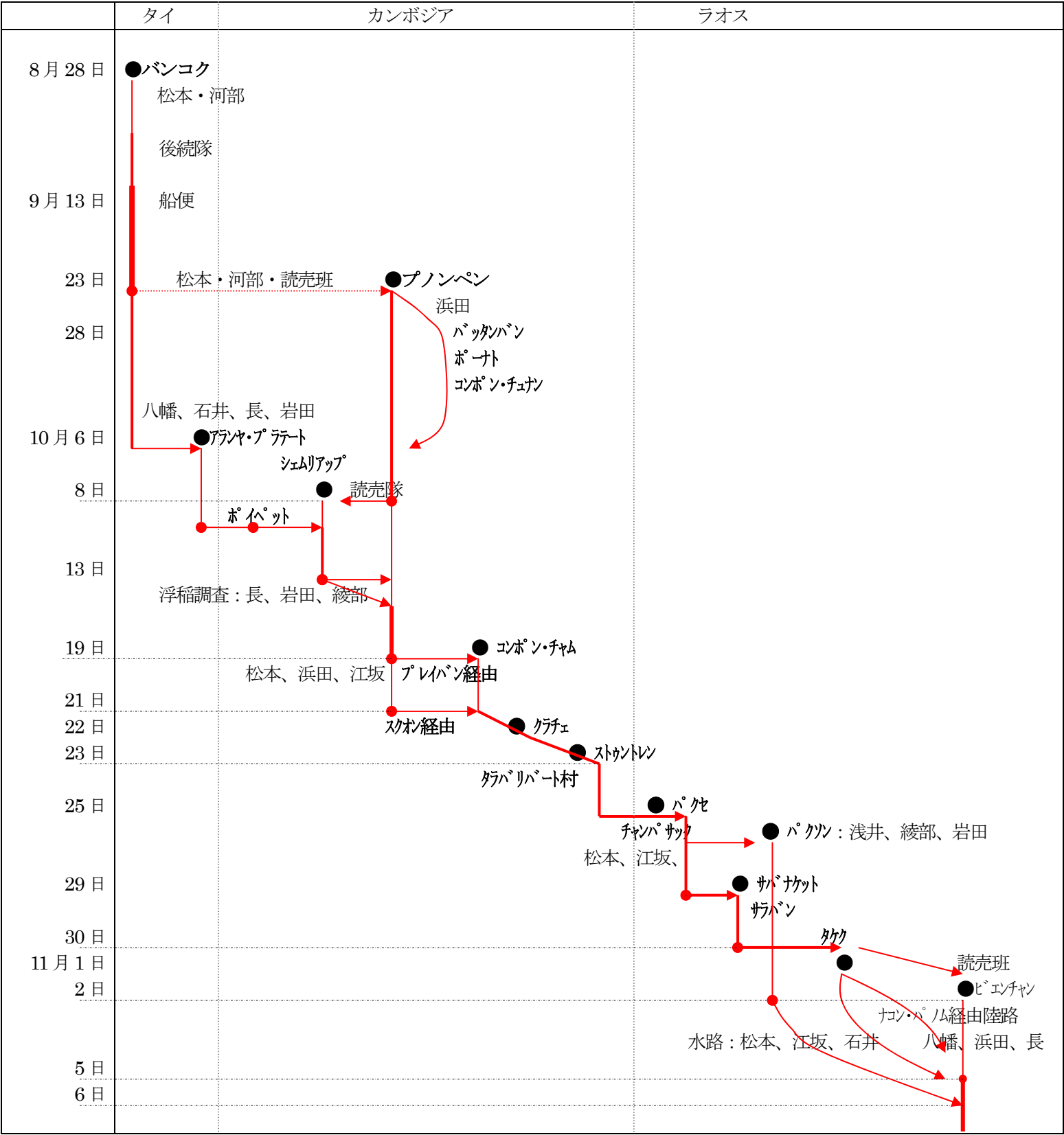
東南アジア稲作民族文化総合調査団 1959『メコン紀行：民族の源流をたずねて』読売新聞社。

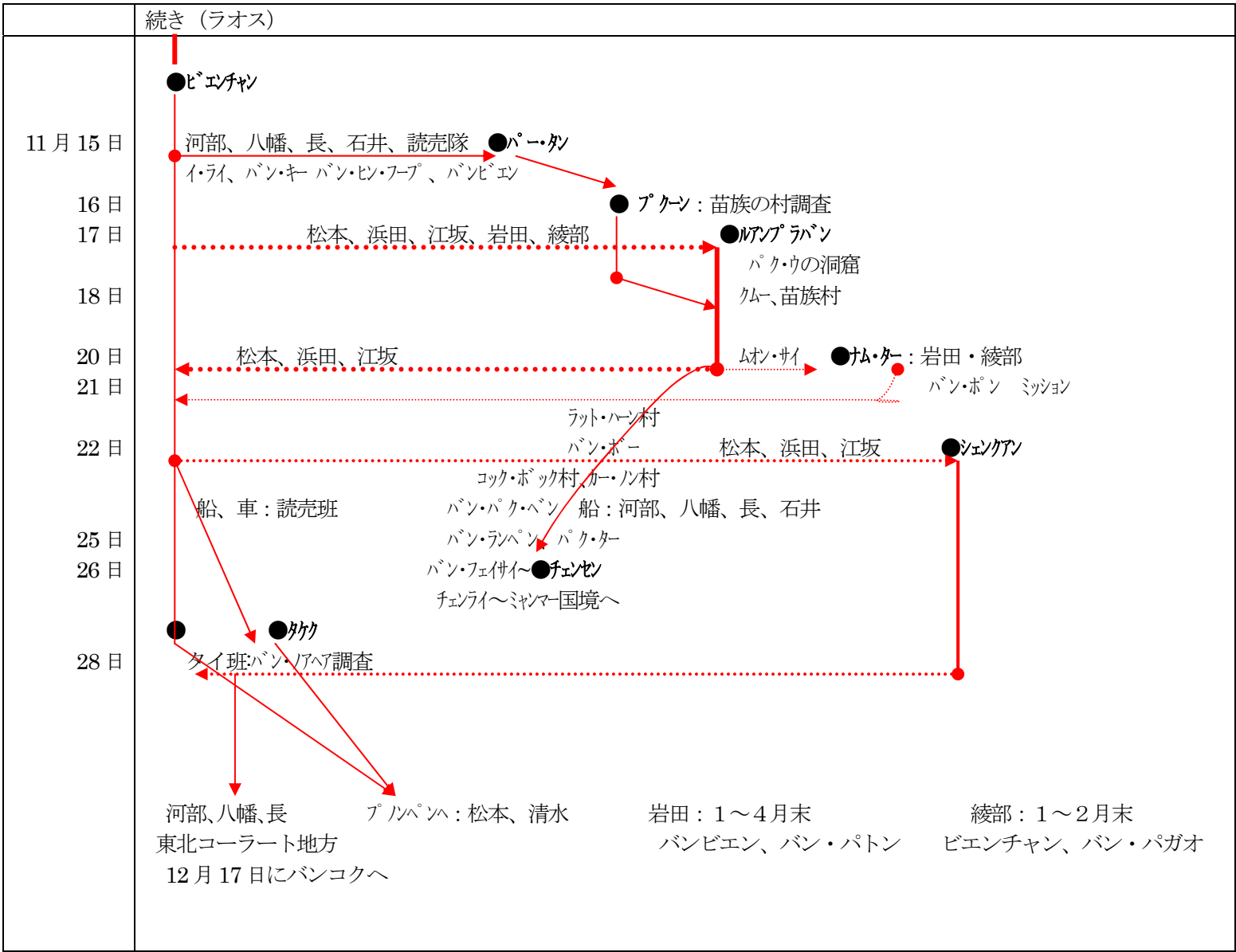
梅棹忠夫 1979『東南アジア紀行（上）（下）』中央公論新社。

山本利雄 1971『メコンの渇きーラオス巡回医療班の記録』講談社。

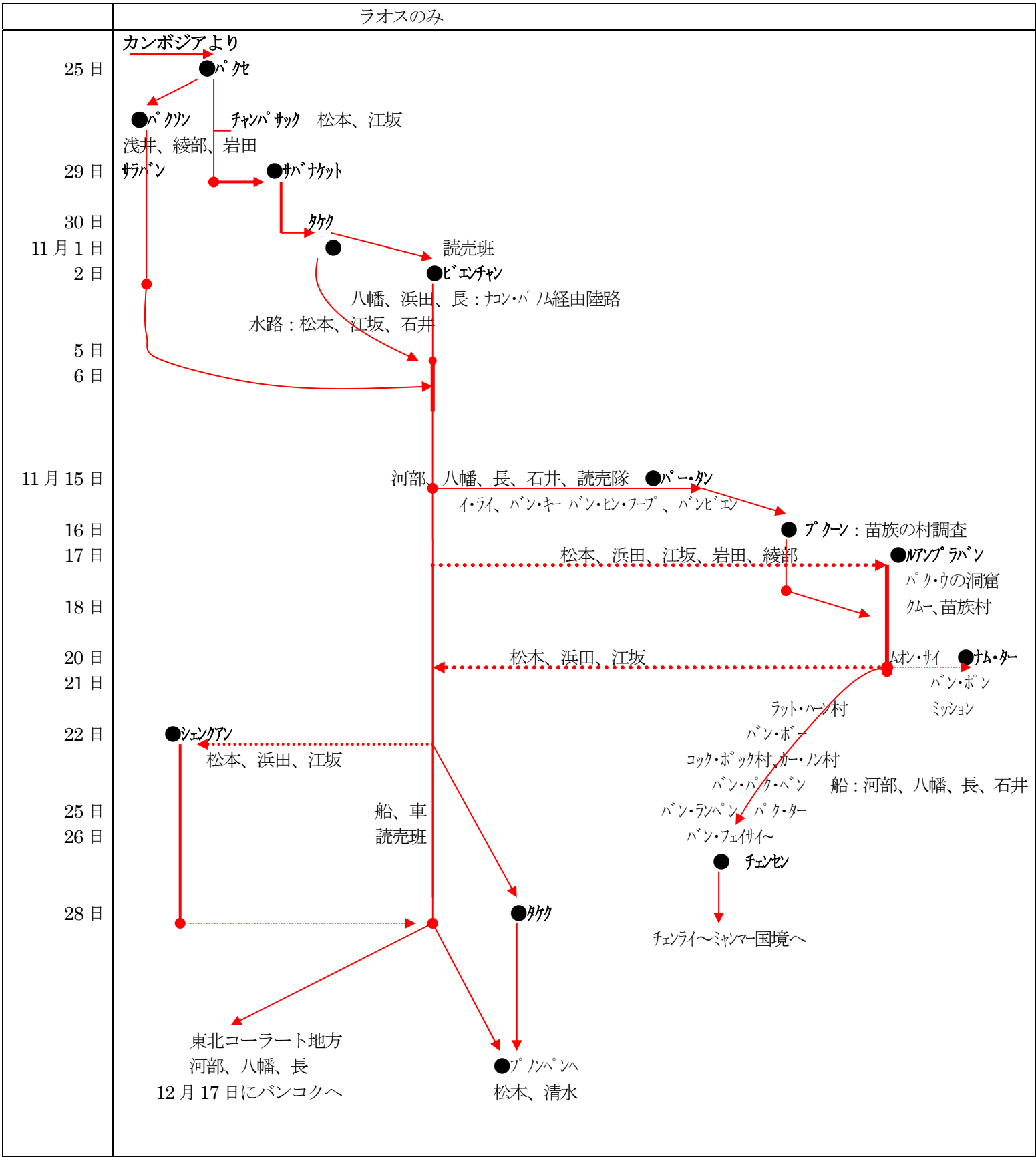
- 19世紀後半
- 1866-68 The Mekong Exploration Commision Report
- 1879-95 The Pavie Mission Indochina Papers
- 1957, 8年 日本民族学協会、東南アジア稲作民族文化調査団、松本『インドシナ研究』、梅棹『東南アジア紀行』
- 1967～74年 上智大学西北タイ歴史文化調査団（3回）
- 1974年 渡辺仁、近森など
- 1990年 林行夫

【稲作民族文化調査団旅行行程－1】





稲作民族文化調査団旅行行程（ラオスのみで整理）



稲作民族文化調査団写真資料の概要

地域別		A	AM	AO	
撮影	専門				
江坂輝弥	考古・歴史	2 1			2 1
清水潤三	考古・歴史		4 2 7 (354+ 73)		4 2 7
八幡一郎	技術文化	7 2	9 5	2 8	1 9 5
長重九	農学	1 1	4 7	7 6	1 3 4
浜田秀男	農学		1 4 5	4 2	1 8 7
岩田慶治	民族学	4 1	7 9	1 0	1 3 0
河部利夫	民族学	6	2 5 5	4 1 6	6 7 7
綾部恒雄	民族学	2 3	4 1 8	2 8 7	7 2 8
浅井恵倫	言語学		2		2
その他		1 (A)	2 2 8 (AM) (121+107)		2 2 9
名無し			1	6	7
合計		1 7 5	1 6 9 7	8 6 5	2 7 3 7